

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

2018 年12月18日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 藤 洋 作 様

所 属 部 局 人文科学研究所

職 名 准教授

氏 名 中西 竜也

助成の種類	平成30年度 ・ 国際会議開催助成			
国際会議名	Redrawing and Straddling Borders: Chinese Muslims in Transnational Fields and Multilingual Literatures			
開催期間	2018年12月1日 ～ 2018年12月3日			
開催場所	京都大学人文科学研究所本館			
参加者	総数 29名	内 訳 スピーカー10名 フロア19名 京都大学学内4名 学外25名 国内21名 海外8名		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()			
会計報告	事業に要した経費総額	1,900,000 円		
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円		
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称) 橋本循記念会		
	経費の内訳と助成金の使途について			
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)	
	旅費交通費	1,281,805	821,975	
	講演謝金	144,000	72,000	
	英文校閲費	65,580	65,580	
	会議運営補助者への謝金	19,200	19,200	
	レーザーポインター代	15,800	15,800	
会議の際の茶菓子代	5,445	5,445		
その他	368,170	0		
合計	1,900,000	1,000,000		
当財団の助成について	文系の企画にもかかわらず、多額のご助成をいただき、大変助かった次第です。会議開催助成は、当初の計画からの変更も多少のことであれば報告なしで認めていただき、とても使いやすかったです。			

成果の概要 / 中西竜也

本国際学術会議、Redrawing and Straddling Borders: Chinese Muslims in Transnational Fields and Multilingual Literatures は、2018年12月1-2日に、京都大学人文科学研究所本館（4階大会議室）において、京都大学人文科学研究所と同志社大学グローバル地域文化学部との共催で行われた。参加者総数は29名。絶対数からいえば決して多かつたとは言えないかもしれないが、学会シーズン中の開催であった（たとえば、「東南アジア学会」の第100回研究大会という一大記念イベントとバッティングしてしまった）ことや、「中国ムスリム」という日本では比較的マイナーなテーマを扱っていたことからすると、予想外に多くの参加者に恵まれたと考える。

2日間の会議では、中西と、共同主催者の王柳蘭氏（同志社大学グローバル地域文化学部准教授）に、8名の外国人研究者を加えた、総勢10名が、各自、約30-40分の研究報告を英語で行った。また、報告が終わるごとに、30分ほど時間をとって、当該報告にもとづく討論を、フロアもふくめた参加者全員が英語で行った。外国人報告者8名は、Zhao Yuanhao氏（中国、中国社会科学院）、Aaron Glasserman氏（USA、Columbia University）、Suchart Setthamalinee氏（タイ、Payap University）、Dror Weil氏（ドイツ、Max Planck Institute for the History of Science）、Diana Wong氏（マレーシア、New Era University College）、Marie-Paule Hille氏（フランス、École des hautes études en sciences sociales）、Wang Jianxin氏（中国、蘭州大学）、Ma Hailong氏（中国、青海民族大学）、という陣容である。ほとんどが中国ムスリム研究の専門家であり、幾人かはそれと関係の深い移民研究の専門家たちである。

研究報告では、これらの多国籍で、年齢層も異なるスピーカーたちによって、歴史学・人類学・社会学といった各様のディスイプリンにもとづき、16世紀から現代まで、中国ムスリムの繰り広げてきた様々な「越境」が論じられた。すなわち、アラブ・ペルシア語文化圏と中国とのあいだで中国ムスリムを介して行われたイスラーム文献の流伝・翻訳、中国ムスリム内部諸派間もしくは彼らとその外部の各種社会集団との交渉・共存、タイやマレーシアにおける中国ムスリム・ディアスポラの移動や超地域的ネットワークの構築・活用、といった「越境」の諸相が検討された。全体として長大な時間と広範な空間が扱われ、中国ムスリムの「越境」が網羅的に吟味されたといえる。

各報告はいずれも新鮮かつ刺激的で、中国ムスリム研究の新たな地平が開かれる思いがした。とくに、従来の中国ムスリム研究の大部分は、漢語の「資料」（文献史料やフィールド言説）に依拠して行われてきたが、本会議の諸報告はいずれも、漢語はもとより、アラビア語、ペルシア語、チベット語、テュルク語、タイ語、マレー語などの「資料」をも活用することで、先進的な議論を行った。すなわち、中国ムスリムが長期にわたって中国やその他の諸地域でマイノリティとして他者と共存してきた実相を新たに明らかにした。また、本質主義を排し、イスラームや中国に関する既存の理解、様々な伝統的カテゴリーを、十分に相対化した。

これらの報告を受けて行われた討論も、きわめて活発であった。報告者からもフロアからも、中国ムスリムの専門家であると否とを問わず、次々に発言があり、討論の時間をあらかじめ比較的長めにとっておいたにもかかわらず、タイムマネジメントに苦勞するほど盛況であった。なお、外国人報告者の方々からは、討論に十分な時間が取れて大変有益であったと、好評を博した。

中国ムスリム研究は、文明間対話・異文化共生の問題と密接にかかわるが故に、人間社会の分断が顕著な昨今の情勢を受けて、近年、世界各国で注目を集めている。その研究を志す若手の研究者も続々と現れており、これからの発展が期待される分野である。そして日本は、間違いなく、当該研究が活況を呈する中心のひとつに数えられる。当会議でも、国内のアクティブな中国ムスリム研究者や隣接分野の研究者の方々にご参加いただき、フロアから鋭い質問やコメントを多数いただいた。本会議は、少なくとも外国人報告者の方々に、中国ムスリム研究における日本のプレゼンスを印象付けたにちがいない。

当該会議の翌日、12月3日には、報告者だけが京都大学人文科学研究所に集まって、本会議の成果の出版に関する打ち合わせを行った。ある国際学術雑誌（ピアレビューあり）で特集号を組むための、提案書の大まかな内容を定めるために、ここでもまた熱い議論が交わされ、あらためて会議の成果や意義が確認された。この議論を経て我々は、当該提案が受理され、本会議の成果が雑誌の特集号のかたちで江湖に問われるならば、中国ムスリム研究の新時代を切り開く記念碑的な一歩になるであろうことを確信した次第である。